

「繋ぐ」^{つな}

高松市立太田中学校 3年 赤坂 有友加

私の母には、田中さんという十年来の聴覚障がいのある友人がいます。先日、三人で昼食をとりながら、学生時代のボランティアで母と知り合って以来の友だちだということ、着物を縫う仕事をしていること、手話にも地域の方言があること、各家庭で味付けが違うように、独自の豊かな表現があることを田中さんの手話を母の通訳を通して教えてもらいました。「困ること、嫌なことはありますか？」と私が田中さんに聞くと、せきを切ったように「外見だけ見ると普通の人と変わりません。だからこそ、心無い言葉を投げられたり、誤解されたりすることも多いです。今もそう、声を出して手話をするだけで、シロシロと私たちを見ます。」とおっしゃいました。事実すでに私たちのテーブルは、他のお客さんの注目の的になっていました。母は何事も無いように田中さんとの会話を続けましたが、私は少し恥ずかしかったです。

そして、三人で家に帰るバスの中で事件は起こりました。母と田中さんが手話で話しているのを、座って見ていた人たちが、「何あれ？」「キモ」「恥ずかしくないの？」と笑いながら話し出したのです。その言葉につられるように、「あの人耳が聞こえんのやね。」「かわいそう。」という言葉も聞こえました。また、あきらかに「あの人たちはかわいそうな人。」という視線も感じました。田中さんは、回りの人たちの表情から状況を読み取り、話すのをやめてしまいました。私は腹が立ちました。心無い言葉を投げている人にも、食事中にシロシロと見られて、一緒にいるのを恥ずかしく思った自分にも…。

そんな時、母は「キモイですか？どこが恥ずかしいですか？自分の御両親や兄弟が手話を使っても同じことが言えますか？それよりお腹の大きい妊婦さんが側にいても、優先席を譲らずお化粧を直しているほうが恥ずかしくないですか？」と乗客に向かって諭すように言いました。バス停に着いて降りる時、運転手さんが、「大切なことを教えてもらいました。」とってくださいました。私も同じ気持ちでした。田中さんは、「勇気を出して私の気持ちを代弁してくれてありがとう。」と母に感謝していました。

私は、正しいと思うことを相手にきちんと伝えられる母を素晴らしいと思いました。さらに、私が田中さんを通じて教えてもらったことは、困っている人に世代や障がいの有無など関係ないということです。人と違うところを偏見をもって見たり、先入観で決めつけたりしないで、少しでも相手の気持ちに歩み寄り、理解し、思いやりをもち、すべて他人事ではなく自分事として考えていかななくてはならないことです。そして、今後も、こういう気持ちを人から人へ繋いでいけるよう自分自身も成長していきたいと思いました。